

Title	ラージェーンドラ・プラサード自伝
Author(s)	
Citation	印度民俗研究. 1973, 1, p. 57-91
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50319
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ラージェーンドラ・プラサード自伝[®]

序

そもそもラージェーンドラ。バーブー¹の自伝に序文がないからとてなにか不都合なことがあろうか、それに私ごとき学問や文学を全く縁なきものとしてきた輩に序文が書けようはずもない、ところが、1918年のケーラー・サティャーグラハ²の際に初めてお目にかかって以来、小生の心をとらえてはなさずにいるパーブーの魅力、それに互いの心を結びつけている友愛の絆のためにことに序文書きを余儀なくされているような次第である。

ラージェーンドラ・パープーに接する人はみなパーブーの淳朴かつ謙虚な人柄に感化を受けずにはいられないが、その香気はまた、この自伝の隅々にまで漂っている.

読者諸氏はこの四半世紀ほどの間にわがインドが如何なる道を辿って来 たかという生々しい歴史、そして崇高な憂国の士の胸中に映じた歴史像をこの 自伝に見出されよう.

② 本書は、本文に言及されているように1940年に執筆が開始され、中断があって、42年に獄中で書き継がれ、再度中断されて46年に完成されたものである。訳出にあたっては、次の第三版を用いた。

Rajendra Prasad, Atmakatha (Sasta Sahitya Mandal, New Delhi, 1962)

本書はこれまでにインドの主要な地方語に翻訳されているほか, 一部抄訳であるが, 英語版も出ている.

Rajendra Prasad — Autobiography (English Version, 1957, Asia Publishing House, Bombay)

なお、本邦では、この英語版の「ダイジェスト版」ともいうべきものが 刊行されているので付記しておく。

吉沢清次郎著『ラジェンドラ・プラサド―インド共和国初代大統領』(新樹社,昭和33年)

の弊, 当時の農村生活, 顧行, 祭礼, 当時の子供たちの日常, あるいは, 教育 状態のありのままが手にとるように見られる。また, プラサード氏の質朴な人 柄や家柄の良さを偲ばせることどもと並んで, 愉快なこと, あるいは, 悲痛な ことなどが描き出されている。さらには, 今日のヒンドゥー。ムスリム両教徒 の間を隔てている深い満はなく, あるのはかげりなき友愛の情景のみである。 それは見る人の心に新鮮なものを与えるものでありながら, 不幸なことに今で はもう消え去ろうとしている。

1905年のベンガル分割³の頃よりバーブーの愛国心は一段と燃え立つのであるが、その後もこの道一筋に一歩一歩を踏みしめて前進して来られた。そして1917年のチャンパーラン。サティヤーグラハ⁴の際にバーブーはガンディー。ジーに身命を托されたのであった。それ以後のバーブーの自伝はそのままわがインドそのものの過去30年間の歴史をも物語ることになる。読者諸氏は本書に人生を向上せしめる力の源泉を見出されることだろう。それだけに愛国の士一人一人に是非読んでいただきたいものである。

バッラブバーイー。パテール識す

(=1)

- 1 (Babu) 社会的地位や学識のある男子に対する敬称。一般にクシャトリヤやヴァイシュヤ。カーストに属する人に用いられる。このほか、目上の人、父親、事務員の意にも用いられる。
- 2 (Khera Satyagraha) 1918年3月グジャラート州(当時はボンベイ州)ケーラー県(アーメダーバード南方)で凶作のため農民たちが免税を願い出たのに当局が応じなかった。そこでガンディーは納税拒否の非暴力的闘争(サティヤーグラハ)を指導した。完全勝利ではなかったが、一応の成功を収めた。
- 3 (Banga bhanga) 1905年7月,時のインド総督カーゾンは今日のビハール州及びオリッサ州をも含んだ巨大なベンガル州を東西に二分し東部ベンガルとアッサムとを併せた一州と西部ベンガルとビハール、オリッサとを併せた一州とを設ける計画を発表した。この計画はインド支配強化策の一環として実施される性格のものであり、ベンガルの歴史的・文化的。経済的背景を無視し、分割統治策を強引に進めようとするものであったがために、ベンガル人の間に激しい反対運動が起こり、ついには全インドの民族主義運動にも大きな反響を呼ぶことになった。これは1911年のジョージ五世の訪印一デリー接見式典一を機に廃止が発表された。
- 4 (Champaran Satyagraha) これについては本自伝の21~23章に詳しい記述がある。ビハール州チャンパーラン県における藍の強制栽培をめぐって白人農園主の不法行為に苦しんできた農民たちのためガンディーは、1917年にサティヤーグラハ闘争を指導し、勝利を収めた。この際、R.プラサードはガンディーに出会い門弟となる。

再刊に寄せて

本書の初版が出たのは1947年1月のことである。それまでのことは本文と付記の中に収められており、この再版にはそれ以後のことが収められる予定であった。再版までの間にはわが国にとって重要な事件が種々起こったが、それには私自身も密接に関係している。たとえば、制憲議会とその動、インドの独立達成と主権の移譲、食糧農業相就任、ガンディー・ジー」の近去ガンディー記念財団の設立、国民会議派の組織化、制憲議会の命による臨時大統領就任、1952年の新憲法による総選挙後の大統領拝命、大統領としての活動と国内各地の遊説、等々。これらについては、いずれも書こうと思えばかなり書く材料はある。だが今は、それを果たすだけの時間の余裕もないし、その立場にもないというのが真相である。したがって、この再版には新しい材料は全く追加されていない。

この時期については、世界史の観点からも特に重要なたた。とのは十分であるう。第二次大戦の後割から解放された世界のの国域を進れた世界のの国域を進行であった。いや、そればかりでなくの戦争福は位のであった。いや、そればかりでなら、戦争福は位のであった。いや、そればかりでなら、であるとはない。というないは世界の何物でもないととが必要という。ないでありながら、それがいら、それがいら、とがのである。であるとができないができないができないができないがあら、それがいら、それがいら、それがいら、それがいら、それがいら、それがいら、その自己を対するとができたからはでというないは世界であるとはである。とができたがでは第ではははにてって、そのはいうものはかが国の世界といったのはかがある。しているものはからはないが、存止しているものにある。しているものにある。とのである。

1947年から今日までの間に筆者の身辺になにが起こり、毎日がどのように過ぎ去っていったかについて叙べるのは、たとえ不適当ではないにせよ不必要なことには相違ないように思われる、筆者にとってはこれは甚だ私的なことであると同時に公的なものでもあるので、これについて説明する資格があるとは思えない、けだし、民族の歴史の中で国家に命じられた役目をどこまで責任をもって果たすことができたかについての判断を下すのは、国民である・

女芸界,並びに一般の方々は初版を歓迎し,惜しみなく讚辞を下さった. ここに感謝の意を表したいと思う.この度,このように再版が新しい体裁のも とに諸兄姉にまみえることのできるのはそのおかげである.

サスター。サーヒトヤ。マレダル社の経験が生かされて本書も装いを新たにし、再版のおかげで改訂されることになった。有難いことである。

ニューデリー 1956年11月26日

ラージェーンドラ。プラサード

舗

1 (ji) ヒンディー語で敬意や崇敬の念を表するために人名や地名に付加される語、男女の区別なく一番普通に用いられる。

1 先 祖

連合州 ¹ にアモーラーという所があるが、同地にはカーヤスト ² がかな り住んでいるということである。ずいぶん昔のことになるが、そのカーヤスト のある一族が同地を出て東へ進み、バリヤー³ に居を定めた、バリヤーに住み ついてかなり経ってからのことであるが その一族から分れた人たちが同地を 出て北方へ進み、今日の(ピハール州)サーラン県 ⁴ のジーラーデーイー村 ⁵ に落着いた、また、別の分家の人たちはガヤー⁶ に移り住んだ、ジーラーデー イー村に移り住んだ人たちのうち幾家族かは、そこからさらに少し離れた村に 移った、このジーラーデーイー村に住むようになった一家が私の先祖というわ けである. この村に移住したのはおそらく私の七、八代前のことである. 先祖 は貧しく、仕事を求めてやって来たのであった、移り住んだその村にはだれも 読み書きのできる者はいなかったし,先祖はその頃も読み書きの出来たカーヤ ストなので、村人たちはそこに居住するのを許してくれたのだった。その頃か ら私の先祖はハトゥアー 領 n に仕えるようになり、事務関係のこまごました 職にありついた者がいたようである.ハトゥアー・ラージは当時さほど大きく はなく、その財政も今日ほどのことはなかった、領主の一族がここを中心に住 むようになったのも後のことで、当時はどこか別のところに住んでいた.

先祖は数世代にわたってハトゥアー・ラージに仕えていた。どのような地位にあったのかは不明であるが、伝聞の限りでは高いものではなかった。村での住居も屋根は草葺きだった、先祖はジーラーデーイー村では大ザミーンダールであったあるカーヤストの小作人であった。私たちの先祖は、よその数ケ村のザミーンダールになったことはあるが、今日に至るまで自分たちの村のザミーンダールに名を連ねたことは一度もない。

祖父はミシュリーラールといい,二人兄弟の弟で,大伯父 8 はチョウドゥルラールといった。ミシュリーラールは天逝したので,子供は男児を一人遺しただけだった。その遺児がマハーデーヴ・サハーイ。すなわち,私の父である。チョウドゥルラールにも息子は一人しかできず,ジャグデーヴ・サハーイといった。ミシュリーラールが全く思いもかけず天逝したので,大伯父は私の父をとても可愛がり,息子同様に養育した。ジャグデーヴ・サハーイは私の父より年長であったが、息子はなく,一人娘に死なれてしまった。マハーデーヴ・サハーイには息子二人と娘三人が生まれたが,娘の一人は幼くしてこの世を

夫った、あとの二人は嬢いだが、姉のバガヴァティーデーヴィーは早く夫に死なれたのでそれ以来、今日に歪るまで実家に住んでいる。もう一人の娘は私たち兄弟の姉であったが、子供はひとりも儲けずに亡くなった。兄の名はマヘーンドラ・プラサードである。私は末子というわけだ。⁹

チョウドゥルラールはマハーラージの身命を守護したばかりでなく、ラージの経営面にも繁栄をもたらした。土地を開墾させるなどして収入もほぼ3倍にした。マハーラージもこのようなわけでチョウドゥルラールには大いに敬意を払い、チョウドゥルラールの前では決して煙草を喫わず、チョウドゥルラールが来ると開けば、水煙管を片付けさせることにしていたという。

当時は廷臣の俸禄は通例、とても少なかった。おそらくディーワーンであった頃ですら、大伯父が月々受けていた浸は50ルピーから100ルピーどまりだった。もっとも、その俸禄には、宿舎に住む家族や使用人全員のためにシーダー、すなわち、米・豆類・バターなどが侯庫から毎月現物支給される。という余禄がついていた、ラージのうちの幾つかの村の徴税もマハージーという余禄がついていた、ラージのうちの幾つかの村の徴税もマハージーはチョウドウルラールに請負わせていた。その中にはマハーラージの自耕地もあって、稲作を行なっていたので、それからの収入もかなりのものとなった。

チョウドゥルラールはなかなかの敏腕家だった。ラージの収入が二倍三倍に増してもなお、民衆から愛され、信頼されていた。そのことは私自身が体験し確認したところでもある。非協力運動の頃、私がその近辺に遊説に行くと行く先々で老人たちがチョウドゥルラールの孫であるという理由で特に歓でくれたものだった。チョウドゥルラールは一家の隆盛にも努めた。年収7、8千ルピーのザミーンダーリー(地主の土地所有権)を買取ったが、それは特に米を売った金で手に入れたものだった。幾つかの村は祖母と大伯母の二人の名儀になっていた。というのは、米を作らせたり売ったり、ザミーンダーリー購入の資金を調達したりするのはこの二人の仕事だったからである。

先にも述べたように、チョウドゥルラールは息子のジャグデーヴ。サハ

ーイと甥のマハーデーヴ・サハーイに勉強をさせた。まだ英語のはやらぬ頃だったので二人ともベルシア語だけを習った。 おそらく、一度はチャプラー 14 に出して英語を学ばせようとしたことがあったらしく、またジャグデーヴおじは英語の本の1、2冊は習ってもいたのであるが、マハーラージがこれを奨励しなかったので、ベルシア語だけで満足せねばならなかった。ベルシア語はマハーラージの令息、すなわち、後のクリシュナプラタープ・サーヒー・マハーラージを教えた家庭教師 16 について習った。

マハーラージ。ラージェーンドラブラタープ。サーヒーの歿後、管理は一時後見人局の手に移った。チョウドルラールは英語を知らなかったのでディーワーンの職務を続けることができず、それにそれまで30年間ほども勤めてきた地位から左遷されるのを快しとしなかったので、それを機に私たち一家とハトゥアー。ラージとの数世代にわたる関係も絶えてしまった。これは私が生まれる前のことである。

ハトゥアーを引き払ってチョウドゥルラールはジーラーデーイー村に戻った.しばらくして,短期間ではあったが,ゴーラクプル県 ¹⁷のタマクヒー。ラージ ¹⁸のディーワーンを勤めた.しかし,その時にはかなりの老齢になっており,土地の気候にもなじめなかったこともあり,間もなくその職を辞してジーラーデーィーに戻り晩年を過ごした.私はまだとても幼なかったが,タマクヒーのことをほんのわずかながら記憶している.

(金)

1 (Samyukt Prant) 英語ではThe United Prouinces of Agra and Oudh, 略称U.P..1835年にベンガル管区より The North-Western Prouinces が誕生,1877年にアワド地方(Oudh)が編入される.1902年以降,アーグラー・アワド連合州と呼ばれる、準知事(Lieutenant Governor)の管轄、インド独立後,1950年1月Uttar Pradesh (北部州)となる.54県から成り、面積294,413Km²、人口88364779(1971年)、

2 (Kayasth) 北部州、ビハール州、ベンガル州などに多い、別名、書記カースト、彼ら自身の伝承ではクシャトリヤ種姓に属し、今日ではいわゆる再生族に数えられるが、その起源は職業上のもので、異種姓の混成と考えられている。ムガル朝時代にも書記。会計係などの職業につくことが多く、それがひいてはベルシア語やウルドゥー語の習得に向かわせることになったものと思われる。今日においても教育程度が高く、知的活動に従事する者が多い。

カーヤストに関する諺の若干を示す.

Kayatha ka chota Gowara ka mota

「カーヤストの息子は (読み書きが達者になるよう) やせ (がよく), 牛飼いの息子は (うんと働けるよう) がっしり (がよい). 」 (ピハール, ムザッファル県)

Kayatha na rahati to ajata ho gayala rahati 「カーヤストにあらざれば、カーストの内にはいないはず、(社会的な地位

があるためカーストに関する生活上の規定に忠実でなくても大目に見られる)」 (ビハール、チャンパーラン県)

以上, B. N. Mishra, V. Mishra (ed.), Kahavat Kosh, Patna 1965参照. Kayasth ka beta parha bhala ya mara bhala

「筆の使えぬカーヤストの息子は死んだがまし.」

Kayasth ka hathiar qalam hai

「カーヤストの武器は筆」

以上, W. Fallon, A Dictionary of, Hindustani proverbs, Sayings, emblems, aphorisms (K. N. Gupta (ed.), Hindustani Kahavat Kosh, New Delhi, 1968) 参照.

第二例に見られるように、一部は飲食面やその他の生活面で厳格なヒンドゥーから 非難を受ける向きもある。その起源については Rajbali Pandeya, Hindi Sahitya kā brihat Itihās, vol 1.(P.107~8)参照.

カーヤストに関するインド社会の含蓄に富む評言を補足的に示しておく、いずれも、Herbert Risley, The People of India (2nd ed., Delhi, 1969, P. 309)より引用。

In a Kayasth's house even the cat learns two letters and a half.

Drinking comes to a Kayasth with his mother's milk.

- 3 (Baliya) ガンジス川及びガーグラー川にはさまれた Uttar Pradesh 最東端の県名及び県庁所在地名. ガーグラー (ghaghra) 川の対岸はビハール州のサーラン県. バリヤー県の人口は1,585,899 (1971).
- 4 (Saran) ビハール州西北部に位置し ガーグラー川とガンダキー (Gandaki) 川とにはさまれる. 面積 6,952k 2 ,人口 4,283,439 (1971). この地方に話される言葉はバリヤー県で話されるものと同じく、ボージブリー (Bhojpuri) 語.
- 5 (Jīrādeī) ビハール州サーラン県中西部にあるシーワーン (Sīwān)市近く (Sīwān から北東部鉄道で北部州 Gorakhpur へ向かって11kM). Chaprā 市から約70 KM.
- 6 (Gaya) ビハール州パトナー県の南部に接するガヤー県、その中心ガヤー市は州都パトナーから約90~KM、ジーラーデーイー村から約200~KMのところにある。
- 7 (Hathua Raj) 1953年、ビハール州土地改革法により廃された大ザミーンダールの領地・ラージは英語ではEstate と呼ばれた・サーラン県の北中部に位置・
- 8 大伯父を特定する語はなく、ここでは「祖父の兄」という表現になっている。以下では、普通、祖父の意に用いられるダーダー(Dada)とかバーバー(Baba)といった語が大伯父に対して用いられている。ちなみに、「いとこ」を指す「父方、あるいは、母方の兄弟姉妹」という表現は普通、用いられず、兄弟姉妹(これも男子と女子の区別しかない)を表わすBhai や Bahin

といったことばが用いられる、特別にそのような関係を表わす必要が生じた場合には、父方や母方を表わすことばと共に用いられる。

- 9 西暦 1 8 8 4 年 (明治 1 4 年) 1 2 月 3 日生まれ、1 9 6 3 年 (昭和 3 8 年) 2 月 2 8 日 歿 .
- 10 (Diwan) 英語綴りDewan. これには、蔵相、藩王国の宰相などの意 味があるが、ここでは、Estate であることを考え執事と訳した。
- 11 枢密院(Privy Council) 1833年の法律により枢密院の司法委員会が、植民地臣民による上告を審問するイギリス皇帝の権能を行使してきた。民事及び刑事の双方について上告が認められていたが、上告資格については、インドの高等裁判所の権限との関連等で一定の制限が加えられていた。
- 12 (Sīdhā) 普通,料理されていない穀類を指す.バラモンなどへの謝礼や喜捨の際もこの方法によることが多い.
- 13 ペルシア語だけ カーヤストの教育としてはそれで十分なものと考えられていたのであろう。なお、本項の餅2を参照。
- 14 (Chapra) サーラン県南西部にある都市、県庁所在地、1961年インド国勢調査によれば人口75,580人、製糖工場多し、Chapra College などの教育機関あり、
- 15 Krishna Pratap Sahī The Indian Year Book 1920 (Bombay)の人名録にHatwa Maharaja Bahadur Guru Mahadev Asram Prasad Sahi (1893 —) の記述があり、1896年10月に父Maharaja Bahadur Sir Kishen Pratap Sahi, K. C. I. E. (Knight Commander of the Indian Empire) の後を継いだことになっている。 Kishen は Krishna の英語綴りであることから両者は同一人と考えられる。
- 16 Maulavi とは本来、イスラム教の法学者や法官を指したが、学者の意にも用いられるようになった。さらには、ペルシア語やウルドゥー語の家庭教師をするイスラム教徒の意にも用いられた。
- 17 Gorakhpur 北部州の東北部に位置する県名、県庁所在地も同名、この県は東部。東南部がビハール州のチャンパーラン県及びサーラン県と接する。
- 18(Tamakuhī-Rāj) ゴーラクプル県の最東部,チャンパーラン県及びサーラン県とに接する所にあったEstate.

2 兄 と 妨

先に触れた通り、私たち5人兄弟姉妹の中ではバガヴァティー・デーヴィーという姉が一番年長だった。この姉は私が生まれる前にすでにカーヤストのある資産家に嫁いていた。子供時分といっても4,5歳頃のことだが、私は姉の嫁ぎ先へ遊びに行った時に、その家の豪奢な生活を見た。その義兄は6人兄弟であったが、その一人一人に付人と護衛が一人ずつついていた。邸内には馬や象が幾頭も繋がれており、広壮な建物が幾棟かあった。ところがどうした理由かは知らぬが、4,5年の間に見る見るうちに年収7万5千ルピーほども

あったという地所もすっかり人手に渡ってしまった。義兄はその頃、ジーラーデーイー村の私たちの家で亡くなった。私は幼くはあったが、それでもその時の騒ぎと大伯父やおじ、父、それに家族の女たちのいかにも悲嘆にくれた様子を今でも憶えている。これが物心ついてから最初に目にした人の死の情景であった。

次の姉はそのことがあってから嫁に行った。兄も嫁をもらった。私はこの姉と兄の結婚式を見た。兄の式の時には行列¹について行ったが、当時4歳ほどだった私は母恋しさに泣出してしまった。それまではたとえ1日や2日といえども母のそばを離れて他所へ行ったことはなかったのであろう。兄は私より8歳年長だったので、私にとっては都合のよいことが多かった。兄が受けた教育を当然私も受けることになり、後からついて行きさえすればよいので、特に困難にでくわすこともなかった。

大伯父が存命だったころのことがはっきり記憶に残っている。私と私よりち、6ヶ月後に生まれた又従妹と二人して大伯父にまつわりついてなんだものだった。大伯父も私たち二人をとても可愛がり、遊び相手になってくれた。ジャグデーヴおじはザミーンダールの仕事をしており、よくチャプラーとの間を往き来していた。いつもなにごとか土地関係の裁判沙汰があってある。兄はチャプラーに出て英語を習っていたので、兄に会いに行くのもおじだがチャプラーから戻ってくるのがわかると、いつも子供たちはいからいところまで出迎えに行ったものだった。もっとも、出迎えというのは、菓子や果物などをねだり、なにでもよいからおじにもらうとそれを持っておじよりも先に家に走って帰り、母にそれを見せることだった。

父は家から離れることがなかった。土地のことにはあまりかかわりがな く、園芸が趣味で、よく長時間庭園で精を出していた、今も父が手がけた二つ の大きなマンゴー園が一家の財産として残っており、なかなかよい実がなる. 父はベルシア語の造詣が深く,サンスクリット語も少しは学んでいた.インド 医術だイスラム医術 3 に関心を持っていたので,その方面の書物も蒐集したり 研究したりしていた。こんなわけで正規の教育を受けていたわけではないが, そちらの方の医術では立派な腕前になっていた. いろんな病人が訪ねてきてい た.薬の買える人たちには処方箋を書いてやり,貧しい人たちには自家製の薬 を与えていた. 薬を調合するのに男が一人雇われていた. 父は脈をとるでも往 診に出かけるでもなく、容態を尋ねるだけで薬を与え、多くの人を治してやっ ていた、そういうわけで父はずいぶん名が売れていた、また、父は頑健で、子 供の頃から道場で体操もしていた。学校の休暇で家に帰った私に父がムグダル 棒が扱い方を教えてくれたり、それを使っていろんな技を見せてくれたりした ことも記憶に残っている. 乗馬も巧みで, 立脈な馬を一頭飼っていた. 子供の 頃、乗馬を兄と私に教えてくれたのも父であった。まだ学生だった頃、休暇で 村に戻ることがあると、兄と一緒にそれぞれ馬に乗って散歩に出かけたものだ った.

子供の頃は田舎の遊びもよくやった。とりわけカバッディー 5 とチッカ

- ⁶ とはよくやったものだ、一日として欠かしたことはなかったろう、大学を 出るまでは続き、休暇で村に帰ると必ずやったものだった。兄も一緒になって 遊んだ、田舎ではもう一つ別の遊びがあった、ドールハーパーティー ⁷ という もので、その遊びの時には木登りをする、私は木登りがこわくてその遊びには 一度も加わったことはなかった。また、村には川もなかったので泳ぎは習わず じまいになった。

母と祖母は私をとても可愛がってくれた、私は小さい頃から早寝早起き の癖がついていた、家は煉瓦造りであったが、中庭を囲んで廊下と部屋がある 古風な造りで、部屋ごとに扉がついており、天井近くに小さな天窓が一つ二つ こしらえてあった、とりわけ冬には夜が長いせいもあって、まだ暗いうちに月 が覚める、すると私は母を眠らせてはおかず、床の中で母を起こす、母は目を 覚ますと朝のお祈りの歌を聞かせてくれる、時には『ラーマーヤナ』 8 などの 物語もしてくれる.そのお祈りの歌や物語などに私は感銘を受けた.こうして 小さな天窓を通して戸外が明るくなったのがわかるまで横になったまま母にお 祈りの歌や物語を聞かせてもらい,すっかり明るくなってから戸外に出る.夕 方あまり早く寝るので、夕飯ははっきり目をあけて食べたことはほとんどなか った.その時分は夕飯も大変おそくなるのが普通だった.子供はおろか,老人 たちも一眠りしてから食事をとるようなことであって、真夜中の12時、1時 より前に食膳につくことはなかった.男たちの食事が済むと続いて女たち、最 後に使用人たちという順序で、夏のうちなど使用人たちが夕節を済ませるのは 夜明け近くになるほどだった、こういうわけなので、夕飯を食べずに寝たから とて自分がいけなかったのではない、と思っている。

家にはカーヤストの料理人 が一人いたので、おばや母は勝手仕事を受 け持ってはいなかった、とはいっても、野菜の煮付けぐらいはしなければなら なかった、日暮れ時になるかならぬに私は母をつかまえて一緒に寝てくれと泣 きつくので、母は仕事の手を休めて添寝をしなければならなかった.でも、そ れは私がすぐ寝ついてしまうので、手間のかかることではなかった、母はまた 起上って仕事にかかるのであった、いつも夜中に起こされて食事をさせられた のを憶えている. 目が開かぬのだが、母が私の体を揺り動かしては九官鳥や鷄 鸆の名前を呼んだりお伽話をしたりして口を開けさせては食物をおしこむとい うわけである。私たちが「外母さん」と呼んでいた乳母がいたが、このように して食べさせるのがとても上手だった。他の人がどんなに工夫してみても目も 口も閉じたままなのだが、この乳母はあの手この手で口を開かせては御飯をつ めこんでくれた、夕方早く床につき未明に目を覚ます習慣は長いこと続いた、 チャプラーやパトナーの学校に行くようになってからも同じことだった.5年 級になるまで夕食を自分の手で食べたことはおそらくなかったろう、バラモン の料理人10がいたので夜には抱きかかえられ例のように目を閉じたまま開いた 口に握飯をつめこんでもらった、私はそれを噛まずに呑み下すのだった。

弁護士をしていた頃も私は夕方早く床につく習慣が抜けずにいた.夕方 依頼人の書類を手にとって見るまではよいのだが、そのうち七時半から八時頃 になると舟を漕ぎだすので仕事はやめにすることになっていた. 1914年から15年にかけて法学彰士の試験勉強をしていた頃の出来事である。当時私はカルカッタ高等裁判所で仕事をしていたのだが、法科大学で教鞭もとって読み始めるのだが、睡気もそれと同時に見舞ってくるのであった。ある日のこと、つう具合では試験勉強の暇は夜しかなかった。それで夕方、本を手にして読み始めるのだが、睡気もそれと同時に見舞ってくるのであった。ある日のこと、つら具合では試験勉強もうまく行かぬ、と考えた。そこで、睡気なったもはならぬ、と考えた。そこで、部屋くな中を手に持って立上ったのだが、それでも軽気がとれぬので部屋の中を歩きがら本を読んだ。どのくらいの間そうしていたのかわからぬが、不飽になるながらすべり落ち、私もそれと同時に床ですんと音をたてのは事実だった。頭が割れなかったのが不思議なほどだった。少し怪我をしたのは明を見つけてはそれで我慢することにした。

鴘

- 1 (Barat) インドでは結婚式は通例,花嫁の家で挙げられる。その際,新郎は盛装し馬や象に乗り,親族・縁者・友人たちと行列をつくり花嫁の家へ向から、その行列をバラートという。ただし、男子のみ参加。
- 2 原文にはAyurvedaとある. インドの伝統医術. 今日も西洋医術と並び盛んである. 中央政府の奨励により Gujarat Ayurvedic University (Jamnagar, Gujarat) などの機関が研究や医師の教育・養成にあたっている.
- 3 原文ではTib (Ar. Tibb = 医療)とあるが、古代ギリシア医術を継承して、 ムスリムにより発達させられた医術・インド医術の影響も受けているが、西暦11世紀以降数百年にわたり独自の発達をとげ、その業績の一部はヨーロッパにも伝えられた、対症療法の面ばかりでなく、予防医学。保健医学・薬草研究などの面に特徴がある、とされる・インドでは、ギリシア医術(Yunani)とか Hakimiと呼ばれており、今日も Aligarh Muslim University (Tibbia College) などでの研究教育が行われており、民間での治療行為も続けられている・
- 4 バット状の棒で、重量を調節できるよう芯の部分に細工がして込る。これを一本ずつ両手に持ち交互に背中のほうにまわして腕や上半身の筋肉をきた える。
- 5 Kabaddi 「カバッディー」と叫びながら敵陣に入り一息が切れない うちに敵方に触れて戻る。無事に戻れば触れられた者が死に、敵方に捕えられ 息が切れれば当人が死ぬ、女子も競技することがある。全インド的な遊戯。
- 6 Cikka 集団遊戯・一方が陣地を築き、他方がその防衛線を突破すると勝つ、ビハール地方の遊戯・
- 7 Dolhapatī 本文にあるように木登りをする遊戯だが、未詳、なおRāhul Sānkrityāyan, Merī Jīvan Yātrā (1), (Calcutta, 1944, P.17) にあるOrhāpātīと同じか、
 - 8 Ramayana サンスクリット語の大叙事詩.近代インド諸語にも多数

の翻訳や翻案がなされている。 ここで言及されているものは恐らく北部インドー帯の民衆に愛読されているトゥルシーダース (Tulsīdās -1523-1624?)による翻案『ラーム・チャリト・マーナス』のことであろう。

9 ヒンドゥーの家庭では飲食面での浄・不浄の観念から料理人はバラモンか同カースト。ないし、それ以上のカーストの者を傭うのが普通。

10 とれは下宿先や学寮に自費で料理人を傭っていたもの。裕福な家庭の子弟にとってはこうした下宿生活は普通のものであった。

3 就 学

文字を習い始めたのは 5 , 6 歳の頃である. 兄はすでにチャプラーに出て同地の学校に通ってた. 私は当時の智わしでモウルが移って来られた。 他の習わして来られた。 佐生は就学式が配いたれた。 佐生は就学式が配いたれた。 佐生には祝人で、 他の二人も親戚の者だった。 が成れた。 で、 他の二人も親戚の者だった。 世には私より2 歳年長のヤムナー・ドで、他の一人はなびくこの世にはないともなる。 ヤムナー兄が兄貴分で、 が足しても子で、 をよいないらきんな人がいた. とれてというまれていた。 おりには私によった。 おりには私によりにしていた。 我戚筋の人だった。 我戚筋の人だった。 我戚筋の人だった。 我戚筋の人だった。 我戚筋の人だった。 我戚筋の人だった。 でいたし、 チェスもよくさられたが、 父に感化されて父のいろいろな長所を身についた。 それに射撃や石したが、 父に感化されて父のいろいろな長所を身についた。 それに対すった。 でいたし、 チェスもよくさらしたことでは父に一目置いていた。 それはともがに しかしたのおじもこうしたことでは父に一目置いていた。 非常に陽気で愉快な人だった。

私たちを教えることになったこの先生は風変りな人で何事にも通じている。というのが口癖だった。そこで、このバルデーヴおじにとって、先生はからかうのに格好の人物となった。おじはいろんなことを先生に話しかけては、それがどういうことであっても知っているとかやれるとか先生に言わせるように仕向ける。そのようなわけで先生はチェスも差せるとおっしゃるのだが、おじと差してみても一度として先生が勝利を収めたことはなかった。私たち子供供このからかいを不安と好奇心に駆られて見ていたが、可笑しくても笑うわけにはいかなかった。このことは大伯父のチョウドゥルラールの耳にも入ったので、大伯父もそのからかいに一枚加わることになった。

ある日のこと、バルデーヴおじが先生に果樹園に猿が入って来ているのでなんとかして追い払わなければならぬ、ひとつ石弓で追い払ってみてはどうだろうか、と言った。すると先生は早速石弓撃ちはわしが上手だ、とおっしゃった。おじは先生が石弓が全然使えないのを知っていたが、からかってみる気になった。おじは先生を果樹園へ連れて行った。石弓と彈とを先生に手渡し、これをうんと引っ張って猿を撃って下さい、と言った。先生はうんと弓を引いて彈を撃ち、猿にどんな傷を負わせたろうかと見ようとしたところが、なんと

御自分の左手の親指からぼたぼたと血が滴り落ちて来た。指の痛みに先生はしゃがみこんでしまわれた。彈は猿に当るどころか先生の親指に当たったのだった。

また別の日のことだが、夕方みなが一緒に散歩に出かけた。大伯父も先生もバルデーヴおじも一緒だった。話がいろいろはずんでいたが、牡牛が一頭現われた。みなが牡牛は人を襲うと言ったのだが、おじがけしかけたものだから先生が牡牛を恐れるはずがない。牡牛は恐れもせずに進み出た先生を突き倒した。このようなからかいはしばしばのことだった。

ある日のことバルデーヴおじは射撃につにたれるところが先生は、何事にせよ自分が通じていないことを認めるとは体面にしまわれた。ときっぱり言ってしまわれた。ときっぱり言うがにも射撃がある。ときっぱり言うがにも射撃がある。た生には男のでは先生と連れ立ちとではかが一羽とまってがたりにはけたかが一羽とまっては生生の子供をもしていかが一羽とまったはは近れないた。ないはずる。た生にもたせてあったがは旧式の先込まで一度は洗ったがではないたととは、先生にもないでとんがははずる。たりはないたのだった。はけたかではははないたのである。先生はなって変していたのだった。はいデーヴおじはすらにはなったのだった。がルデーヴおじはようやくのことで変にかつぎこまれたのだった。先生はようやくのだった。

日課は次のようなものだった。朝早く起きてマクタブ(学校)へ行く・学校というのは私の煉瓦造りの家の離れの軒先である。その離れには部屋が一つあり、そこに先生と家族が住んでおられ、私たちはその軒先で大きな椅子に腰掛けて勉強した。先生は教える時は木製の寝台や椅子に腰をかけておられた。朝早くその教室へ行ってまず前日習ったところを復習する。復習を早く済ませれば、それだけ早く次の学課を習うことになる。私はしばしているうちに夜れば、それだけ早く済ませ、次の課も先に習う。そうこうしているうちに夜が明け太陽も少し昇る。すると召使いが呼びに来て洗顔させ、母親のところへ

食事に連れて行く、この時間が半時間から45分間あり、休み時間となる、朝 食を済ませて戻ると暗誦しなければならぬ、それも暗誦してしまうと先生から 『本を閉じろ』との命が下る.本を閉じると今度は石板をとり出さなければな らぬ、この間にも少々遊び時間がもらえる、時によってはまた家に戻って間食 することもあった.字は石板に書く.いっぱいに書いてしまうと消す.そうす る間にも笑ったり遊んだり走りまわったりする機会もあった.昼には水浴びを したり食事をするので1時間から1時間半の休憩があった、先生は寝台に寝そ べるが、私たちはしばしは眠くないことがあるので横になったまま石板を盤に してチェスをさす。駒は先生が目をさます前に片付けてしまう。チェスもその 頃覚えたのだと思うが、何時、どのようにして、だれから習ったのか不明であ る、午后には次の課を教わる、それも少し暗誦して先生に聞いていただくと日 のくれる1時間半ほど前に遊びの時間をもらう. その時間にはまり遊びやチッ カーをする.夕方,燈火がともるとまた.本を開いて勉強することになってい た、日中習ったのを両方とも暗誦して先生に聞いてもらう、それが済むと先生 は本を閉じるように命じる.すると本を閉じて規律通り先生にお辞儀をして家 に帰る.

夕方になるとすぐに私は睡気に襲われる。それでいつも、うつらうつら しているのを見つけられて先生に打たれはせぬかと心配だった.遊びの兄貴分 はジャムナー兄だったが,勉強が早く終わるように工夫するのもやはりジャム ナー兄だった.夕方の勉強のために燭台に油をさすことになっていた.ジャム ナー兄は日中に布ぎれに灰や砂などを包んだ小さな袋をこしらえて手もとにし のばせておく、燭台に油が多く入っているように思うと、芯を上げるような素 振りをしてその袋を燭台の中に入れる.すると見る見るうちに油を吸い取って しまうので燈火は間もなく消えかかる.先生は女中がどうしてこんなにわずか しか油をささなかったのかと言って立腹されるが仕方がないので勉強を早く切 り上げることになる。また、時にはジャムナー兄は小用を口実に教室を抜け出 る.ところが小便もせずに走って私の母親のところへ行ったり自分の母親のと ころへ行ったり、あるいは、ガンガー兄の母親のところへ行ったりして、もう だれそれが居眠りしかかったので早く女中に呼びにやらせてくれぬと先生にた たかれると言う、ジャムナー兄が小用から戻るとほどなくして女中が来て先生 にもうおしまいにしてやって下さいと言うので先生も課業を終わりにするとい うようなことだった.

ある日のこと、例のようにジャムナー兄が駈けて行くのを同じ村の人で私たちの遠縁のおじにあたる人が見つけ、先生にジャムナーがどこかへ駈けて行った旨を告げた、ジャムナー兄はお取調べを受けることになったが、小用に行ったところ暗くてこわくなり駈け出したのだ、ということで命拾いをした。

ジーラーデーイーの村で得たペルシア語の知識はすべてこの先生に負う ものである。私たち三人もこの先生が好きになっていた。家を離れてチャプラ ーに英語を習いに行かねばならなくなった時には先生も私たちもともどもつら いおもいをしたことだった。 (註)

- 原文には Aksararambh とある、これはヒンドゥーの通過儀礼の一であ 1 り、 就学式 (Vidyarambh Samskara) とも呼ばれる. 5 歳から7 歳にかけ て行われるのが普通。ただし、今日これは学校教育の一環として位置づけられ るようになっている. ヒンドゥーの儀礼として行なわれた場合, 護摩をたき, ヒンドゥー教の神々に祈りを捧げ、師を拝み、文字の書初めをし、パラモンに 布施を贈り、祝福を得る。ところが、カーヤスト。カーストの著者の場合、師 はムスリムであり、「ピスミッラー(神の御名により)」と原文にあるところ からも Bismillah Khani * (ビスミッラー・ハーニー) と呼ばれる, ム スリムの習い初めの式をしたものと考えられる. この式では師は, ' Iqura, bi-'smi rabbi - ka alladhī khalaqa'(創造主の御名により読め)〔 コーラン第96章第1節参照]とアラビア語で復習させたり、コーランの第一 章句を復唱させたりする、先生にはターバン、金子、衣服などが贈られる。と れは5歳4ヶ月4日目に行なわれることになっていた.ともかく,これはカー ヤストにあっては、カーストとしての職業訓練の開始といった意味で重要なも のであったようだ、なお、Rajbali Pandeya, Hindu Samskar, Varanasi, 1966 (2nd ed.) PP. 137-142 を参照のこと.
- 2 (Shīrnī)本来、ペルシア語で(正しくは、Shīrīnī)、(甘味)菓子の意、ウルドゥー語やヒンディー語では神、聖者、師にお供えする菓子の意にもなる。ただし、ここでは先生ばかりでなく、親戚縁者などにも内祝いとして贈られたものと考えられる。
- 3 石弓、パチンコ Gulel、Gulail という、普通、木の叉を用いてつくる、亜鉛製のものもある、彈は土くれ、小石、ないし、土と棉花とを煮固めたもの、
- 4 'Karīmā' 別名'Pand Namah'.ペルシアの詩人サアディー 《Musharrib - ud - Dīn Sa'adī》(1184?-1291) の教訓詩でイ ンドではペルシア語初学者用の教科書.
- 5 原文には'Mamkima'とあるが、正確には'Ma Muqima'、サァディーの著作とされる。
- 6 (Khalikbari) インドのペルシア語・ヒンディー語の詩人・学者、アミール・フスロー (Amir Khusro 1253-1325) のペルシア語・ヒンディー語辞典。
- 7 原文には Khushhāl sīmiyā 及び Dasturulsīmiyā とあるが、正しくは Khushhāl sibyan (subyan), Dasturul sibyan (subyan) で、 Dars-i-Nizāmī (ニザーミー・コース)と呼ばれた伝統的なペルシア語教程の教科書名・
 - 8 "Gulistan" 前述のサアディーの代表的作品の一(1258 年).
 - 9 'Bustan' これもサアディーの代表的作品の一(1257年).
- 10 (Kaithi) カーヤスト文字の意、ナーガリー文字から派生した文字で、カーヤストが主に用いてきたためにこの名がある。ビハール地方を中心に

用いられるが、さらに3種類の書体にわけられる。

4 村の生活

当時の田舎の生活はと言えば、今日よりはるかに質素なものだった。ジ ーラーデーィー村とジャマープル村とはそれぞれ独自の村落を成しているので あるが非常に近接しているので両村の境界線は判然としない、したがって人口 に関しては、両村のものを合計しても差支えなかろう、この両村を合わせてみ るとほとんどすべてのカーストの人々が住んでいる. 人口は2千人を越えるだ ろう、当時、田舎で手に入るほどの品は大抵この村でも手に入った、今日では 新しい商品を扱う店ができて、パーン ¹ やビーリー ² も売っている.その頃は そのような品はまだ村では手に入らなかった、もっとも、葉煙草や噛み煙草は 売っていた。衣料品店は立派なのがあったので、他の村からも客があった。中 にはよそから仕入れに来る商人もいた.米・豆類・小麦粉・調味料・塩・油, 等はみな村で手に入ったし、ちっぽけなものながら、薬店もあり、ハッレーと かパへ-ラー あるいはピーパル ³ などを売っていた. 私の記憶では, 一軒も なかったのは菓子屋だけのようだった。村にはコーヤリー・カースト4の者た ちもかなりいたので、野菜類は十分間に合っていた、村のアヒール ⁵ たちは少 数だったが、近くの村々はかなりいたので牛乳やダヒー(凝乳)に不自由する ことはなかった。糸紡ぎをする人もかなり多かった。村にはジュラーハー 6 も おり、その紡いだ糸を賃織りしていた、チュリハール ⁷ はチューリーをこしら え. ビサーティー 8 は糸まきなどのこまごましたものを外から仕入れてきて売 ったり自家製造したりしていた、ムスリムはチュリハール、ピサーティー、タ ワィー⁹、 ダルジー¹⁰、 ジュラーハーといったカーストに限られていた。シャ イクとかサイヤド11を名乗る人たちは一人もいなかった. ヒンドゥーはプラー フマン $(\vec{x} \ni \pm \nu)$, $\vec{\jmath} = \vec{y} \vec{J} - k^{12}$, $\vec{J} = \vec{z} \wedge - \nu^{13}$, $\vec{J} = \tau \wedge \nu^{13}$, $\vec{J} = \tau \wedge \nu^{13}$, $\vec{J} = \tau^{14}$, $\vec{J} = \vec{J} \wedge \nu^{15}$, $\vec{J} = \nu^{16}$, $\vec{J} = \nu^{17}$, $\vec{J} = \nu^{18}$, $\vec{J} = \tau^{18}$, \vec{J} - n 19 ドゥサード²⁰など、あらゆるカーストの者がいた、最も人口の多かっ たのはたしかラージプートだった。そのうちの一部は由緒ある立派な家柄とさ れている地主層に属し、他は普通の百姓だった、カーヤストはジーラーデーイ -村には5家族あったが、そのうちの3家族は私の縁家で、他はよそから移住 して来た人たちだった.

たいていのものは村で手に入るものだから村から出る機会は滅多になかった。村では週に2日は市が立った。近くの村々から商人たちがそれぞれの商いの品を頭や牛馬の背に散せたり、あるいは、牛車や馬車に積み込んでやって来た。市には菓子屋もやってきたし、魚や肉類も手に入った。それでも手に入らぬものがあれば、シーワーンに行くことになっていた。シーワーンには警察署があり、治安判事がいる。役所や裁判所もあり商店もある。この町は当時の田舎の人たちにとってはとても重要な役割をもっていた。私の記憶では、田舎では親戚でもなければよそから人の訪ねて来ることは滅多になかった。私た

村にはちっぽけな僧院が2院あり、それぞれにサードゥ(修道僧)が一 人ずつ住んでいた。村人たちは食事を提供し、サードゥは朝夕鈴や鎧を鳴らし 盤明を捧げて²²お祈りをしていた. お祈りの時間には村人たちも幾人かが集ま ってくる. 時々私たちもそれに加わってはサードゥからトゥルシーの葉²³をい ただいていた.ラーマナヴァミー²⁴や特にジャンマーシュタミー²⁵の際には僧 院の飾りつけが行われた。子供たちはみな色紙や金紙や銀紙で花をとしらえて はその神殿の入口や台座に飾りつけた、儀式にも加わったし、断食もした。ダ ディカーンドー²⁶の時にはうこんを混じたダヒー(凝乳)をうんとかけ合って 遊んだものだった。ほとんど毎年のようにカールティカの月(太陽暦10月~ 11月) になるとだれかパンディット27がやって来ては、1ヶ月か1ヶ月半の 間, 『ラーマーヤナ』, 『バーガヴァタ・プラーナ』 28 , あるいは, なにか他の プラーナ聖典の物語を語って闡かせた、物語の完結する日には村人がみな集ま ってなにがしかのお供えを捧げる習わしになっていた。私の家からのお供えが 一番多かった。というのは、私の家がそのような家柄に見られていたからであ り、物語もたいていは私の家の前で語られることになっていた。また、その経 費も私の家が賄うことになっていた。村のパンチャーヤット²⁹の催す物語とな れば、村中の家が順番にパンディットの食事の世話をすることになっていた。 私の家もその中に入っていた。夜にかけてのことなので私たち子供は物語をあ まり多くは聞けなかった。とりわけ私には夕方になるとすぐ寝てしまう癖があ ったからである。もっとも、燈明を捧げてのお祈りの時間になると起こされて お供えのおさがりを食べさせてもらっていた.

もう一つ村人たちの娯楽と教育に役立ったのは、ラーム・リーラー^{3c}(芝居)であった。これはアーシュヴィンの月(太陽暦9月~10月)に行なわれる。ラーム・リーラーを演ずる一座がどこからともなく現われては半月以上もの間賑わせたものである。リーラーは隣村のジャマーブルで演ぜられること

もジーラーデーイー村で演ぜられることもあった、この芝居も一風変っている。 ラーマやラクシュマナ³¹などに扮する人たちは無学なので、舞台裏で一人の男 がトゥルシーダース 32 の『ラーマーヤン』を手にして小声で、「ラーマさまが 仰せになった。シーターよ」、などと言う。すると舞台上のラーマがそれを大 声で復唱する、役者はそれぞれこのようにして教えてもらった台詞を復唱する のであった. 観衆は登場人物の言葉のやりとりをさほど楽しんでいるわけでは ない、というのは、観衆もとても大勢の上に舞台も百ヤードから二百ヤードも 広がっているからである、それよりも登場人物の動きや特に戦などの立廻りが 楽しみなのである. 北方にラーマの城, 南の方角にはラーヴァナ³³の城がつく られる. あるいは. アヨーディヤー ³⁴ やジャナカプラ ³⁵ の都坡のセットがつく られるということであった、毎日、当日の段落に因んで仮装行列もそれなりの ものが出たが、なんといってもラーマ の結婚式、ランカー島³⁶での戦闘、それ にラーマの灌頂式、すなわち、即位式³⁷が圧巻だった、結婚式の当日は象や馬 を借り集めて結婚式の花婿の行列そのままの飾りつけをする.ランカー焼打ち の日にはちょっとした建物までつくられ実際に火が放たれる. ハヌマーン 38 や 猿共,それに悪鬼の様々な面があり,役者たちはそれらを適宜に着用していた が、私たち子供には本当に恐ろしいものに見えたものだ。猿の衣裳はたいてい 赤色をしており、悪鬼のは黒色をしていた、ラーマ、ラクシュマン、ジャーナ キー³⁹の衣裳は特別誂えになっており、その着付けや化粧には2時間ほどもか かる. リーラーは夕方の4時から6時にかけて演じられる. ラーマやラクシュ マンは普诵の人のような歩きぶりをせず、足を高々とあげて歩む、戦の時には 立廻り独特の訓練が施される。即位式の日には村や近辺の人たちがお供えをラ ーマの足下に差出す、食事以外にリーラーを演ずる人たちに実入りがあるのは すべてとの日に限られる、翌日はラーマ、ラクシュマン、ジャーナキーに美し く着飾らせて檀那衆の家々を回る。そのような家庭の婦人たちは深窓制40のた めに人込みの中にリーラーを見物に行けぬことになっている.そこで.婦人た ちは訪れたラーマたちを拝み、祝儀を出すのであった。

子供時分から私が感銘を受けたものの一つに『ラーマーヤン』の読誦がある。村には文字の読める人はほとんどいなかった。その頃、たが変異をしていた。私たちが習れている。大変を対析にも近辺の村にも一枚もなかった。私たちが習れている。大変を対析にもではあったが、月額3、4ルピーだった。村には、カースト・パンコラーハーだったが、月額3、4ルピーだった。村には、カースト・パンコラーハーだったが、月額3、4ルピーだった。村のほかったが、カイティー文字の読めるムスリムが第のほかと、カースト・パンコラーの一人がでは、たとえばで、カースト・パンでの表していた。女子は「一、大きなの人たちだったが、毎夕、幾人かが、たとえば「一、大きなの人たちだったが、毎夕、がいどこかに、たとえば「一、大きなの人たちだったが、毎夕、がいどこかに、たとえば「一、大きなの人たちだったが、ではその中の一人が『ラーマーヤン』の時にシンバルを表示して、大きなの中の一人の前の始まるたびごとに繰りていたのようなわけで文字を知らなくてもラーマーヤナのチャウバーで知って、

おり暗唱できる人たちがかなりいた。とりわけ讚歌となっている二行詩はたい ていの人が暗唱していた。

聞くところによると、よそではその日は大いに酒盛りをしたり、肉を食べたりする風習があるとのことである。だが、幸いなことに私たちの村では一度も見かけなかった。私たちの村のラージプートやブラーフマン、それにプーミハルは飲酒を罪悪だと考えている。地方によってはカーヤストで酒を飲むさいる。しかし、私たちの家では古くからのしきたりがあって飲まないことすいる。これは今でも続いている。若い者も年長者を見習ってそれには手を出さない。これは今でも続いている。

ジャンマーシュタミーやラーマナヴァミーについては先に触れたが,デ ィーワーリーの祭り47もなかなか盛大だった、祭りが近付くとどの家も美しく なる、壁が真白に塗りかえられたり、柱や戸が油で磨き上げられる、当時、燈 油は使用されていなかった。多分,手に入らなかったのだろう。からし油,亜 麻仁油、けしの実油、ひまし油などを燃していた、ディーワーリー祭には金持 も貧乏人も相応に素焼きの小皿の燭台に燈火をともしたものだった。金持ちの 家では隅々にまで燈火をつけ、バナナの木の柱を地面にいけて建て、竹でアー チをつくる.燈火のつくり出す様々な絵模様がとても美しく.目を楽しませて くれたものだ、大人たちが燭台の置き場所を決め、子供たちはその指定の場所 に燭台を置いたり、それに油をさしたり、あるいは火をともしたりする. 夕方 灯のともる前にラクシュミー神48にお祈りを捧ける。まず、ラクシュミ - 神像とトゥルシーに燈明をあげ、続いて他の場所にも明りをともす。明りが ともってから賭けごと⁴⁹をすることになっていた. 私たちがするのはいわば名 ばかりの賭けごとだったが、本当にお金を賭けている人たちを見たことがある. ディーワーリーには特別の燭台が用いられる. だが, カールティカ月いっぱい はランタンをトゥルシー・チャウタラー⁵⁰に置いたり、宙につるしたりしてい る家もあった.

ダシャラー祭り⁵¹は主にザミーンダールたちの祭礼と考えられていた.しかし、ナヴァラートラ⁵¹ の期間にはカーリー女神⁵²が祀られることがしばた.とばあった。この時はカーリー像が運んでこられ、大変盛大に祀られた。私たこの村ではカーリーでななかったが、近くの村で祀りのあったとはなかったが、近くの村で祀りのあった。そのがある。大変な評判になったので私たち子供も見物に行かせてもらった。そのに行って文字通り真黒で手には真赤に染まった頭蓋骨と刀を持ったカーリーがで拝んだ。ラームリーラーのラーマの即位式もたいていはダシャラーの日か、その一両日前後に行なわれることになっていた。ダシャーの当日には大谷の家族全員を引きつれ、まるで小さな行列が進むようにしてシヴァ神を拝みに行くことになっていた。

っていた.中には一年中そのアナンタを腕にまきつけている人もいた.そうい う人は丈夫なアナンタを自分でこしらえ、かなり長くして、簡単に結びつけら れるように工夫していた. こうしてアナンタを結ぶ人は肉や魚は口にしなかっ た、同じくトゥルシーでとしらえた首飾りや数珠をつける人も肉や魚は口にし なかった、物語会,ラームリーラー,ラーマーヤナの読誦,あるいは,との種 の戒行や祭礼などにより村ではいつも宗教活動が続けられていた. それにムハ ッルラム⁵⁷にはタージャー⁵⁸を祀る習わしもあった。それにはヒンドゥーも参 加した、ジーラーデーイー村でもジャマーブル村でも富裕なのは少数のヒンド ゥーはかりだったので、その人たちがこしらえるタージャーは貧しいムスリム がかーのものよりも大きくて立派だった。ムハッルラムの期間中,毎日のように木剣 59プープ1- ^y-6 などを用いた棒術や剣術の演技が行なわれる. 1 0 日日, す なわち、最終日の人出は大変なものだった、村中のタージャーがカルバラー⁶¹ に運ばれる. その途中, ひっきりなしに「あゝアリー, あゝイマーム」という 追悼の掛声がかけられ、木剣などの演技がくりひろげられる、熱の入れようは 大変なもので、この時はヒンドゥーとかムスリムとかいった区別はすっかりな くなってしまう。菓子やティチャウリー(水にひたしておいた米と黒砂糖)が 振舞われ、みなはそれを有難く頂戴するのであった。だが、ヒンドゥーはムス リムが触れた水や果汁シロップは飲まない.⁶² もっとも, ムスリムもそれを不 快なとととして受取ることはなかった それをヒンドゥーの本分と考え,かえ ってムスリムのほうがそのような場面に出くわさぬよう気を配るほどだった.

その頃は村でのもめごとというのはあまりなかった。なにか事があれば村の世話役⁶⁵たちがそれを解決することになっていた。もし世話役でも扱いかねるようなことがあると私の大伯父かおじのところへ持込まれる。大伯父やおじもパンチャーヤットに加わってそれを処理する。もっとも時折盗難事件の発生することがあった。村のパニヤー⁶⁶たちは小金をためていたので,盗人たちは、それらの家に夜中侵び込んでは少しの金を盗んでいくのであった。私の記憶していることだが、一度は夕刻、よその村の市場から帰る途中、追剝ぎに金

と衣類を奪われた人があった.このような事件があると警察から警部補が部下を率いてやってきて2日ほど村に泊まる.警察のお出ましとなると村は大騒動だった.村中に緊張がみなぎる.疑わしい人がいると,家宅捜索が行なわれる.村には手癖がよくないとされていた人が2,3人いたので,警部補はやってくるとすぐさまその人たちを捕えて後手に縛り上げ,投げとばしたり,ひどくなぐりつけたりする.近くの村にも嘘か真か同じように盗癖があると信じられている人たちがおり,その人たちも縛り上げて連れてこられ,投げとばされて地面に何時間も倒れていたのを私も目撃したことがある.

私の家は俺かばかりの土地を持っていたが、小作との争議は少なく、裁判所に用のできることもほとんどなかった。だが、私の家が土地を持っていたのと同じ村にやはり土地を持っていたある地主との間には俺かの土地のことで長い間裁判沙汰が続いた。祖父の代に始まって父の代を過ぎ、父の死後ようやく兄が和解することにして決着をつけたようなことだった。ヌーヌーおじはチャブラーによく出かけたので、出かけた折はチャブラーの学校で学んでいた兄の様子を見に行ったり裁判所に出かけたりしていた。

餢

- 1 Pan きんまの葉に種々の薬味・薬品を調合したもので、インド人の 暗好品。
 - 2 Biri 粗製葉巻き.
- 3 ハッレー, バヘーラー, ピーパル Harre もしくは, Harra ーミロバラン (Myrobalan, Terminalia Chebula), Bahera ミロバラン (Belleric Myloban, Terminalia belerica), いずれも果実が薬用・Pipar こしょう科の植物 (Skt. pippali)で薬味,薬用となる (long pepper).
- 4 Koyarī, Koirī, Koerī 北中部インドに住む野菜栽培を主たる生業とするカースト、Kāchhīとも呼ばれる。
- 5 Ahīr 北部・中部インドに住み、牧畜業や農業に従事するカースト。 牛飼いが多い。
 - 6 Julaha 北中部インドに住むムスリムの織工カースト.
- 7 Curihar 女性が着用する(金属・ガラス・角などを 材料にした)手首飾りの製造販売に従事するカースト.
- 8 Bisati 普通, 化粧品や裁縫用品などの小間物の行商人をさすが, ここでは製造にも従事していたことがわかる.
 - 9 Thawai レンガ職人, 左官の仕事をする. ラージ (Raj)ともいう.
 - 10 Darzī 本来, 仕立屋を生業とする.
- 11 インド亜大陸のムスリムの中でアラブ、ベルシア、アフガン、ムガルなどの血統を継ぐと称する人々は、それ以外の人々(主として下層ヒンドゥー・カーストからの改宗者)と社会生活上区別される、そして前者の中でも上下の関係が見られるようである。H. Risley の前掲書〔註 1 (3)〕によれば、次の

ような諺が北部インドにひろまっていた. "Last year I was a jolaha; now I am a Sheikh; next year if prices rise, I shall become a Sayid." (P. 121)

この諺からもこのような区別が階級的な側面を持っていることは否めないが、婚姻上の制約要因としても機能してきた。同書によれば、たとえば、ベンガルのムスリムは、(1)上述の外来のムスリム及び最高カーストのヒンドゥーの改宗者から成るAshrāf もしくはSharif (高貴なる)と呼ばれる集団と(2)その他のKaminā とかAjlāf (下賤)と呼ばれる集団とに分かれる。(P. 122)

シャイク(もしくは、シャイフ Shaikh)とは、本来、アラビア語で、ウルドゥー語やヒンディー語では、年長者、長老、族長、聖者などの意にも用いられる。もともと、アラブの正しい血統を継ぐことを指すが、インド亜大陸のムスリムの中では上述のように「高貴の」出身とされる人々を指す称号である。もちろん、これにはインドでの改宗者も含まれているが、これを称する人たちサイヤド(Saiyad)に次いで高貴なものとされる。サイヤドとは本来、教祖マホメットの血統を継ぐ者の意であるが、上述のAshrafの中で、最も高貴であるとされる。英語綴りではSyed となる。

なお、ちなみにムスリムの婚姻について触れておく、「概して、高階級のムスリムの社会は内婚への傾きを示す上位婚を骨組みにして成っているのに対し、職業的な集団である低い階級のムスリムは厳格に内婚を守っている、と言える.」(The Imperial Gazetteer of India, The Indian Empire Vol. 1, London, 1909, P. 329)

- 12 Rajput ラージャスターン地方を中心に西部。北部。中部インドに多い、いわゆるクシャトリヤ(武士。統治者)種姓に属すとされるカースト。
- 13 Bhumihar ビハール地方を中心に北中部インドで農業に従事する. バラモン種姓に属すると自称。Bhuinhar, Babhan とも呼ばれる。
- 14 Kurmi 北インド一帯、特にビハール、東部 U. Pに多く、農業に従事するカースト、地方によっては Kunbi とも呼ばれる。
- 15 Kamkar 主として裕福な家庭での使用人として、水汲みや屋内の掃除といった家事労働や雑役に従事するカースト、Kaharともいう。かごかきや農業労働者もいる。
 - 16 Turaha 不詳. ベンガル地方の楽士カースト (Turaha) と同じ?
- 17 Gond 中央州北部を中心にオリッサ、ビハール、その他の地域にも分布している有力な部族民、15,6世紀には中央州ゴーンドワーナー地方に独自の王国を築いたことがある、現在は居住地によって生活形態が異り、農業(労働者)に従事する者もいる。
- 18 Pom 北・中部インドにひろく見出される。かつては有力な部族であったようだが、今日ではいわゆる不可触賤民とされ、掃除人や隠亡として働いたり、死獣処理などに従事することが多い。下級の音楽士もいる。一部はかご、みなどの竹細工にも従事。
 - 19 Oamar, 英語綴り Chamar 本来, 皮革業を生業とするカースト.

- 20 Dusadh 養豚業に従事することが多いとされるが、村の番人などもつとめる。
- 21 サーラン県シーワーン地区の中心、シーワーン市の人口は1961年の 国勢調査では27.401人、この地方も砂糖きびの栽培が盛んである。
- 22 Ārtī (Skt. ā-rātrika). 燈 明や香をたいて益に載せたものを回しながら捧げ、神像や高貴な人、客人を拝む礼拝様式。
- 23 Tuls I-dal トゥルシーは、めぼうき、しそ科の草本・葉や根が芳香を有し、葉は薬用(解熱剤)にもなる。ヒンドゥーが聖なるものとしてあがめる。この葉をヴィシュヌ派信徒は非常に神聖視し、神前に供え、おさがりをいただく。
- 24 Ramanavamiインド暦1月=チャイトラ月(太陽暦3~4月)の白半9日に祝われるラーマ神の降誕祭。
- 25 Janmashtamī インド暦 6月 (8~9月) の黒半の 8日 に 祝われる クリシュナ神の 降誕祭.
- 26 Dadhikando ジャンマーシュタミー祭にダヒー(凝乳)にうこんの 根からとった粉末を混じたものをかけ合う祝いの行事。
- 27 Pandit 普通、学者や学問を修めたブラーフマンを指す、ここでは Kathavacak と呼ばれ、職業的に『ラーマーヤナ』や『マハーパーラタ』といった叙事詩やプラーナ聖典などの一部や全部を語りながら併せて説教もする人を指す。
- 28 Bhagavata Purana 神話・祭祀・歴史などの集成であるヒンドゥー教のフラーナ聖典のうち代表的な十八プラーナの一。(特にその第十章が)クリシュナ神の生涯について詳しく、ヴィシュヌ派信徒に重んじられる。近代インド諸語への翻訳や翻案も多い。
- 29 これは一村落の自治組織として機能したパンチャーヤットである・村にはこのほかカーストの自治組織として機能してきているカースト・パンチャーヤットがある・村落パンチャートは政治的・社会的・経済的変動になる。大きな影響を受けた・特にイギリス支配の強化や独立運動の経過の中で組織化を容をとげてきている。1920年以降には、政府の指導下に法制上の組織化を行なわれ、また、独立インドでは、地方自治の強化・確立という観点からをを合ったの生活に密着した建設・環境衛生・農業改良・手工業振興。仲裁などの方面にわたる自治組織として位置づけられてきている。とこに言及されて大き面にわたる自治組織として位置づけられてきている。実際的な影響力は大であった。なお、カースト・パンチャーヤットは村落ばかりでなく、地区や県、州、時には全国的な連帯を有するものである。
- 30 Ram Lila 叙事詩『ラーマーヤナ』(普通、トゥルシーダース (1532-1623)の東部ヒンディー語による翻案『ラームチャリット・マーナス』)を題材にして特にダシャラー祭に北インドー帯の町や村毎に演じられる演劇、職業劇団によって上演されることもあるが、一般にはそれを催すコミュニティーの中から選ばれた素人が出演する。この行事はそれぞれのコミュニティ

- ーの代表によって遂行される. ラームリーラーについては Norvin Hein, The Rām Līlā (Milton Singer (ed.), Traditional India ; Structure and Change, Philadelphia 1959)が詳しい.
- 31 『ラーマーヤーナ』の主人公ラーマはアョーディヤーのダシャラタ王の皇太子であるが、ヴィシュヌ神の化身とされる。ラクシュマナはラーマの異母弟であるが、兄に忠実で、両者の関係は兄弟愛の理想像とされる。ラーマは異母弟バラタに王位を譲り、自らはラクシュマン及びシーターと共に14年間の国外追放を父王の命として拝す。
- 32 Tulsīdās, Gosvāmī 上記, 第2章副8及び本章副30 を参照.その著『ラーム・チャリト・マーナス』 (略称, ラーマーヤン) が北インドのヒンドゥーに深い感銘を与えてきている.他に, 'Vinaya Patrikā', 'Gī-tāvalī', 'Kavitāvalī' などブラジ語による著作も遺している.
- 33 Ravana シュリーランカー(ランカー)島の魔神、ラーマの妃シーターを誘拐するが、最後にラーマに敗れる、ラームリーラーは大きな広場に舞台装置を設けて演じられる、この城のセツトは後述のように焼き払われる。
- 34 Ayodhya 上記制 31 を参照。 今日の北部州東部ファイザーバード 県のゴーグラ川沿岸に位置。 ダシャラタ王の都。
- 35 Janakapura 今日のビハール州東北部, ミティラー (Mithila)の都、シーター姫の父 Janaka王の都、
- 36 Lanka ラーヴァナの都城があったとされる、スリーランカー(セイロン)島、ラーマの率いる軍勢が攻め込み、大合戦の後、ラーマの軍勢が勝利を収める。 翻33参照。
- 37 即位式 ラーマがラーヴァナを退治しアヨーディヤーに帰還後,即位する.
- 38 Hanuman 『ラーマーヤナ』に登場する猿軍の将で、ラーマのために 大活躍をする、今日では神格化されており、厄除けの神とされる。
 - 39 Janaki シーターの異名,「Janaka 王の姫」の意.
- 40 Parda 本来、ペルシア語で、「幕・カーテン・ベール、など」の意をもつが、ここではムスリムの子女やヒンドゥーの一部上流家庭の子女を深窓に置き、外界、特に家族以外の男性との接触を制限する風習を指す。もっとも第6章に見られるように家庭内においても大変複雑かつ厳しい女性隔離の風習があったようだ。
 - 41 Murkattī Hisab 詳細不明.
- 42 Holi インド暦の12月、すなわち、パールグナ月(2~3月)の満月の日を本祭りにしてヴァサント・パンチャミーの日から祝われる豊作祈願祭、満月の前夜に火祭りがあり翌日、色水をかけ合う。
- 43 Vasanta Pancami インド暦の11月=マーガ月(1~2月)の白半5日に祝われる. との日寒期が終わり春に入る. 学問の女神サラスヴァティー (Saraswati Shri) を祀るため、Shri Panchami ともいう.
 - 44 Puri は小麦粉をこねてせんべい状にのし、精製したバターで揚げた

- もの、Malpua も同様にしてつくるが、砂糖を加える。
- 45 Gulāl これは、ひしの実や穀類などの粉を辰砂やサフランの花を用いて赤色や紫色に染めたもので、ホーリー祭の時、互いに塗りつけ合ったり投げ合ったりして遊ぶ。
- 46 Abir これもやはりホーリーの際、グラールのようにかけ合ったり投げつけ合ったりする赤い色粉で、ひしの実を粉にし、うこんや石灰などを混じてつくる。
- 47 Diwali ないし、Dipavali インド暦の8月・カールティカ月(10~11月)の朔日を中心にその前後の5日間にわたり行なわれる。商人たちの祭りとしての色彩が濃く、富の女神ラクシュミーをまつる。商人たちにはこの朔日から新年度が始まる。
 - 48 Laksmī ヴィシュヌ神の配偶神で富と幸運の女神とされる.
- 49 この日、賭けごとをするのは、この日賭けごとに勝てば一年中幸運に恵まれると考えられているからである。
- 50 Tulsi-cautara 先述のように〔制4 (23))、ヒンドゥーに神聖視されるトゥルシーは一部の家庭では中庭に設けられたチョウタラー(壇)や鉢に植えられている。これはTulasi-ghara ともTulasi-thala とも呼ばれる。
- 51 Dashahara インド暦7月・アーシュヴィナ月(9~10月)の白半朔日から十日にかけてインドで広く祝われる。十日目は勝利の十日(Vijaya Dashamī)と呼ばれる。先述のラームリーラーもこの祭りの一環である。ベンガル地方ではこの九日目までがドゥルガー祭(Durga Pūja) としてドゥルガー女神がまつられる。これはナヴァラートラ(Nava Ratra)祭とも呼ばれる。
- 52 Kālī デーヴィー, ないし, マハーデーヴィー (Devī, Mahā Devī) と呼ばれるシヴァ神の配偶神は多数の異名, 異形を有しており, ドゥルガーやカーリーはその一. カーリーとは「黒き女神」の意. これはベンガル, ピハール地方を中心に尊崇される. その姿態がすさまじい.
- 53 Ananta Caturdashi インド暦 6 月(陽暦 $8\sim 9$ 月)の白半 1 4日に祝われる祭り、アナンタとはシェーシャ龍(Sheşa Naga) を指すが、これはヴィシュヌ神の化身であり、ヴィシュヌ神の床となり、また、大地を頭上に支えているとされる。この祭りはヴィシュヌ神とシェーシャ龍とをまつるものである。
- 54 Katha ヒンドゥー教の祭りや戒行の際に、プラーナ聖典などに伝えられているそれらにまつわる伝説や由来をバラモンや学僧に語ってもらうと大変御利益があるとされる。
 - 55 Khir 米に砂糖を加え牛乳で煮たもの。
- 56 Ananta 正式には14本の絹糸をより合わせ、それに14の結び目をつけたもの。
 - 57 Muḥarram イスラム暦の1月1日から10日間。マホメットの女婿

アリー(第四代カリフ)の次男フサインがウマイヤ・カリフ朝との抗争のため カルバラーで殉教(680年10月10日)したのを追悼する祭りで、シーア派には特に重要な祭礼、ムハッラムはイスラム暦の第1月の名称である。

58 Tajiya、Tajiya 上述のイマーム。フサインの陵の模型、竹や紙などを用いてつくる。この前で殉教のフサインを追悼する。これをかかえて練り歩きもする、十日目にはこれを埋葬する。

- 59 Gadka 剣術に用いられる木剣.
- 60 Phari ガドカーによる剣術の際、防具として用いられる革製の楯。
- 61 Karbala イマーム・フサインの殉教地にちなんだ、既述のタージャーの埋葬される場所。
- 62 ヒンドゥーの飲食に関する浄。不浄の観念では、ギー (Ghi), すなわち、精製バターを用いた料理、乳製品、煮てない穀類は下級カーストや異教徒の手から受けて食べてもそのためにいわゆる「汚染・不浄化」されることはないが、水や水を用いて料理したものを食べれば「不浄」になるからである。
- 63 「di (1)祭りを詠んだ詩, (2)それを書いた色紙, (3)家庭教師が詠んだ (1)の謝礼 (生徒が親に読んで聞かせてから受け取り, それを先生に差上げる.) 64 Jum arati 「木曜日の」という意. この日は一般に布施や施しの日とされているので, 先生へ贈物をしたものと思われる.
 - 65 Panc パンチャーヤット [本章4 (29)参照] の役員, 世話役.
- 66 Baniya 本来,「商人」の意。商業に従事するカーストの者や金貨しを指す,総称的な呼称。したがってこれは多数の副カーストに分かれる。しばしば、穀物や雑貨を商う小商人を意味する。

5 英語教育 1

てからその頃まで私は時折ラームリーラーやそのほかの市を見に近隣の村へ出かけた以外は多分どとへも行ったことはなかったように思う。もっとも、まだ赤子も同然の頃、母に連れられて、連合州のバリャー県にある。私たちの村からはおよそ50キロの距離にある母の実家へ行ったことがあるそうだが、私は全く記憶していない。

私がチャプラーの学校に行くことが決まるとヌーヌーおじは、私を一度 チャプラーへ連れて行き、いろいろと見せておいたがよいと考え、連れて行っ てくれた、数日間、兄のいたところに泊まり家に戻った、記憶にある限りそれ が私にとっては生まれて初めての汽車の旅だった。だが、その時はまだ、入学 には至らず、村に戻ると再び先生について勉強を始めた。そうこうしている最 中に家に不幸があった、ヌーヌーおじが亡くなったのである、私たちの家はプ ーランプラサード・ヴァルマー氏の家とは深交があった。このヴァルマー氏の 御尊父は母方の祖父のもとで暮らしておられた。この祖父にあたられる方を私 たち一家はいささか古くから存じ上げていた. 存じ上げていたというよりむし ろ両家は懇意にしていたというべきであろう. そもそも両家がハトゥアー・ラ ージに仕えていたのが因縁で、それ以来の交誼であった.ヌーヌーおじはプー ラン・バーブーの御尊父の結婚式の行列に加わって行った帰りにコレラに罹っ たのだった.その時は一応よくなって家に戻ったのだが,村でもすさまじい勢 いでコレラが蔓延していた、おじは一度よくなってから2、3週間後に再びコ レラに罹った。その日のことは今なお私の記憶に残っている。午前11時頃に 症状が出始め、その日の夜には亡くなってしまったのである、父は薬石の限り を尽した。20キロほどの距離にあるダローリーから西洋医に来てもらった。 最初との病気に罹った時はこの医者のおかけでよくなったのだった.しかし、 当時はまだ速く走る乗物はなかったので、夜中の12時に医者が着いた時には おじはすでに息を引き取ってしまっていた.おじが亡くなったので,家の中は 大騒動になった。大伯父にとっては一人息子であり、家事は内といわず外とい わず独りで切盛りしていたからである. 大伯父は70歳ほどになっていたが, ヌーヌーおじはまだ45歳にもなっていなかったろう.父は家業にはあまり関 心がなかったので、なにかにつけ一層混乱を深めることになった。したがって 私のチャプラー行きはしばらくの間お預けになったというわけである。

ほぼ1年半後に私はチャプラーへ行くことになった。チャプラーでは1ケ月3,4ルピーの家賃で小さな家を一軒借りていた。兄は召使一人と料理人のカーヤストー人と一緒に住んでいた。最初、しばらくの間、家庭教師にも来てもらっていたが、私が行った頃にはだれにも来てもらっていなかった。兄弟一緒に暮らすようになった。私はチャプラーに着いて間もなく、当時のジラー・スクールでは一番低学年の第八級に入った。この学校でアルファベットとデーヴァナーガリー文字を同時に習い始めたのだった。兄はその時には第二級から第一級に進み、大学予科の入学準備をしていた。私には家庭教師はつかなかったので、学校で習うこと以外になにかたずねることがあれば、兄にたずねることにしていた。家庭教師をつけてもらわなかったことは私にはかえって幸い

だった。おかけで学校の授業を真剣に受ける癖がついたし、早くから少し自信を持つようにもなった。学年末には兄は大学予科の入学資格を得るため試験準備をしており、私は年度末試験を受けることになった。私は試験の成績がとてもよかった。第八級で首席になったばかりでなく、点数も非常によかったものだから、校長はダブル進級、すなわち、1学年とびこえ2級上の学年への進級を考えてくれた。

校長はクシーロードチャンドラ。ラーイ。チョウドリーという有名な先 生で、学識豊かな校長として知られていた、学校の中でもなかなかにらみがき いており、生徒は言うに及ばず先生方も校長の前に立つとふるえあがるほどの 威厳だった、試験の成績が発表され、私は第八級から第七級に進級することに なった。生徒たちがみな喜んでいたところへ小使がやってきて,担任の教師に 校長が私を呼んでいる旨を伝えた。校長に呼びつけられるのはなにか悪いこと をした生徒ということになっている. 私はふるえ上がり, 恐る恐る校長室へ行 った.だが、そとへ行ってみると恐怖は失せてしまった.校長は「2学年特進 して第六級に進んでみないかね」と仰せになった. 私はその時, 少々まごつい てしまった、少しは嬉しく感じたが、思いがけないことであり、それに一挙に2 学年進級した場合,途中の一学年の学力をどのようにして補うかという不安も あった、そこで私は、兄に尋ねてから御返事申上げます、と答えた、すると校 長は、「君が兄というのはだれのことかね」と尋ねた、私が兄の名前を言うと 校長は吹き出してしまった。校長は兄を教えたことがあり,また,予科の受験 を許可したのも校長であったから、当然のことながら兄を知っていた。兄は宿 で試験勉強をしていた。校長は、「君は兄に尋ねたいと言うが、君の兄さんの ほうがわしよりこのことについては詳しいだろうかね・・・まあよかろう. 尋ね て来たまえ」と言った。私は校長室を出ると、まっすぐ兄のところへ駆けて行 った、兄は、今は故人となったパーンケービハーリーラール・パーブー、それ にもウルヴィー。シャフィー。ダーウーディーと一緒に受験勉強の最中だった。 私がその旨を話すと3人とも大変喜んでくれた。兄たちはいろいろ話し合った が、兄の考えでは、一度に2学年進級すると後でわからなくなって勉強もうま くゆかなくなろう、ということだった。兄は私と一緒に校長のところへ行って 自分の意見を述べた。校長は笑ってやはり私に言ったのと同じことを繰り返し た.「君のほうがわしよりこのことについては詳しいというわけかね.」.と いうわけである、結局、私は第七級はやらずに第六級へ進級させられた。

間もなく兄はパトナーへ試験を受けに行き、試験が終わるとそのままジーラーデーィー村へ戻った。それからは私はチャプラーの宿に独り暮らすことになった。もっとも、召使と料理人はいた。それに村での勉強仲間だったジャムナー兄とガンガー兄もチャプラーに出て来て学校へ通っていたので、ここでも一緒になり、一緒に勉強することになった。多分私が10歳から11歳にかけてのことである。

兄は予科入学資格試験に合格し、パトナーのカレッジに入ることになり パトナーへ行くことになった. 私も兄について行かせてはどうかということに なり、そうすることに決まった。そこで、私たち3人は兄についてパトナーへ行った。兄はパトナー。カレッジに入学した。私たち3人は、当時、評判もとてもよく学生も多かった。コーシュ学院(T.K. Ghosh Academy)に入学した。その学校に入ってみて2級特進については、やはり兄の言ったことが校長の言よりも正確だったと感じた。毎日、いくつかの学課で級友たちのほうが私より多くのことを知っていると感じるのであった。私は皆に追いつこうと努めた。パトナーでも家庭教師はつけてもらっていなかったので、わからないところがあれば、兄か一緒にいた兄の友達に尋ねることにしていた。

チャプラーにいた頃からすでに私は毎夕、学校から戻ってなにか間食をするとフットボールやそのほかの運動をしにもう一度学校へ出かけるのが習慣になっていた。たいていはフットボールかクリケットをやった。一部の上級生と先生がテニスをやっていた。わけても教頭が熱心だった。パトナーでは学校の運動施設が十分ではなかったので、私たちは大いに不便を感じていた。学校の敷地も広くはなかった。それでも私たちは空いているところへボールを持って行っては少し駆けまわってくることにしていた。兄は運動が上手で、フットボールやクリケット、等がとても巧みだった。パトナー。カレッジでも名を知られていた。私たちは時折試合見物にパトナーの球技場へ行ったものだった。

パトナーではサーワン月³の毎月曜日に立つ 月 曜 市 がとても賑わった。私たちはその市に出かけるのがとても楽しみで、兄にこまごましたものを買ってくれとせがんだものだった。一度はとても美しい神像が欲しくてならず、どうしても買ってくれとせがんだものだから、兄はとうとう根負けして買い与えざるを得なくなったこともあった。一度はやはりその月曜市でバーンケービハーリー・バーブーが掏摸に懐中のお金をすられたことがあった。兄も一緒にいたので、掏摸が揃えられ、裁判にかけられると、バーンケー・バーブーと兄は証言することになった。その裁判を見物に行ったのが、私の記憶では裁判所に行った最初だった。

パトナーでは、職さがしに田舎から出てきていた兄の親友が、私たちと一緒に暮らしていた。パトナーでもやはり家を一軒借りて、バーンケー・バーブーと私たちは一緒に住んでいた。この兄の親友はちょっとした相撲取だった。体操も少々心得ており、庭に小さな土俵を設け、皆に体操や相撲を教え始めた。一度バーンケー・バーブーは相撲を取っている時にけがをしたのでしばらくの間は足が痛んで困った。それからは相撲や体操にはあまり熱がなくなってしまった。

私たちはパトナーで初めて「プレーグ」(ペスト)という病名を耳にした。そのときはこの恐ろしい病気のことをポンペイ市のこととして聞き流していたのだったが、瞬く間にチャプラー地方にもこの疫病が入りこんで根をおろしてしまった。それ以後この疫病は今日に至るまで連綿とこの地方に多かれ少なかれ禍をもたらしてきている。大飢饉が襲ったのもちょうどその頃だった。休暇になったので村に帰ってみると役人たちが救援活動にやって来ており、私の家を宿所にしていた。

パトナーには約2年間いた、見は大学入学資格の試験を受け、私は第六級から第五級、さらに第四級へと進んだ、兄は試験を済ませると家へ帰った、私はジャムナー兄とガンガー兄、それに召使の他はだれもいないところで2、3ヶ月過ごした、夏休みに入ると私たちは帰省した。

曲

- 1 ここでは英語の教育及び主として英語を媒介語とする西洋式の中。高等教育の意で、それまでの家庭教師についての教育とか伝統的(宗教的)古典教育とは異なることを示す。
- 2 Agrawal アガルワーラーとも呼ばれる、北部インドに多い有力な商人カースト、ヒンドゥーとは限らず、ジナ(ジャイナ)教徒もいる、こうしたカースト名や副カースト名は概ね苗字になると考えてよい。
 - 3 インド暦の5月、陽暦の7~8月にかけて、

6 結 婚

自分のことでありながら明確なことは記憶していないのだが、第五級办第四級にいたころに結婚した。多分第五級の時だったろう。式は夏休みに挙げた。私たちがチャブラーの学校に行っていた時にすでに大伯父も祖母も亡くなっていた。私たちは二人が病気だという報せでチャプラーからジーラーデーイー村に戻った。二人は家族全員の見守る中で僅か数日を間にはさんで亡くなった。したがって次は私の父が戸主となった。私の結婚の取決めも父がしなければならなかった。

私の舅になる人はアーラー市²で代言人をしており、その弟はバリヤー市で弁護士をしていた、二人がジーラーデーイーを訪れた。母のそばにいると父に呼ばれた、二人は私を見て、なにか尋ねていたが、気に入ったということで引き揚げて行った。聞もなくティラク³が届けられたが、それにはしきたりで、衣類や台所用具などの他に、お金も添えられていた。私の記憶する限り父はお金のことではやかましいことは言わなかった。現金と品物とで2千ルピーほどのものが届けられていた。私が12歳と数ヶ月の頃だった。

当時は2千ルピーのティラクと言えば立派なものとされていたが、今では5千ルピーとか7千ルピーといった額のものでさえ、私ほどの身分のもたとっては少ないとされている。ティラクが多ければ多いほど結婚行列は盛ちのでなければならぬし、結納の装身具も多くしなければならぬ・私の結婚へなの頃は家の経済状態はよくなかった。一つにはこの3、4年間に次から次れる家族が3人も亡くなり、それぞれの法事にかなり出費がかさんでいた。それぞれの法事にかなり出費は増してきていたの別鑑のために小作料も減収になっていた。ところが、出費は増してきてにがのである。私たちをチャプラーやパトナーの学校で勉強させるには毎月なにがのである。私たちなければならなかった。長らく係争中の訴訟もあり、それを送金しなければならなかった。長らく係争中の訴訟もあり、には費がかさんでいた。このように随分不如意な中でもやはり結婚式にはを惜しむわけにはゆかなかった。一家の名誉にかかわることだったからである。

父は結納の装身具に関する限り金を惜しまなかった。その他の準備にも 恥ずかしくないようにしたいと思っていた。それというのも一家にとっては父 の代になってから初めての結婚式であったからだ。それに従来通りの金遣いを し、盛大にしなければ、お兄さん(大伯父のことを皆がこう呼んでいた)が亡 くなった途端に格式が下がったと言われることになる。かようなわけで父とし ては、私の結婚式は世間に恥ずかしくないものにしたかった。

私たちの田舎では結婚式の行列のために象や馬をたくさん借りて用いる 風習がある。そのほかにも行列に入用の品を借りて用いる。結婚式の日取りは 大変めでたい日に決まった。このような吉日のことを田舎の言葉で「カラー・ ラガン」というが、星位がよく、吉祥な時間が大変都合よく得られるのでこの 日に挙式をするのが最上とされている。この吉日には式に必要ないろいろな道 具を借りるのがなかなか容易ではない。借り手が多いからである。私の行列に は象や馬を多数借りる手配をしたのだが、やはり吉日のため間に合わなかった。 値かに象が1頭と馬が3、4頭間に合わったに過ぎなかった。

式はジーラーデーイー村から20マイルほどのバリヤー県のダラン・チャプラーで挙げられることになっていた、2日の道程である、途中のサラユー(コーグラー)川 4 は船で渡らねばならぬ、行列はジーラーデーイー村での後礼を終えて出発した、象馬が足りなかったのでかごを多く傭わねばならなかた、荷物は牛車に載せた、私は花婿が乗ることになっている特別のかごに乗った、兄はわが家に飼っていた大きな馬に乗ったが、皆の出発を見送ってからた、兄はわがけ、昼飯を出すことになっていたところへは皆より先に着くなど、その他の乗物に乗っていた。父はかごに乗っており、家族や縁家の者もかごやその他の乗物に乗っていた。

花婿の乗るかどはとても不格好なものである。天井部分はついていないが、布製の日除けがかけてある。ジェート月 5 のことである。猛烈に暑く、熱風もかなり吹いていた。私はそのかどに乗って行かねばならぬのに、その日除けには強い風が吹きつける。それに、かごには銀細工がしてあるのでかなりの重量ときている。かごかきのカハールたちにはそれをかつぐだけでも大変なところへ、強い風で日除けが気球の役目をする。カハールたちには大変つらい仕事だった。私は私で灼けつくような陽射しと熱風に苦しめられていた。

その日はなんとか無事に過ぎて夜はサラユー川のほとりのある村にとりのある村にとりのある準備にとかれた。ないいろな料理が出された。夜が明けるとサラユを渡るとが出された。荷物やかで、牛馬といったものの象も今一つ元紀ではたがまはそのまま水の中を渡らせることになった。そこで幾艘局に出りがで渡らせようとしたのだがやはり失敗に終わった。結局になりたりはるのはあきらめることに決まり、行列は象なしということががられるといるのはあきがいたのをとてが発金がつた。私の式を挙げたので流っていた村から少しばかり離れたところで父も結婚式を挙げたのでなっていた村から少しばかり離れたところで父も結婚式を挙げたのでなっていた村から少しばかり離れたところで父も結婚式を挙げたのであるに、大伯父がハトゥアーのディーワーンをしており、行列には数十頭

の象が用いられた、父には自分の式の時には数十頭もの象の行列があったのに息子の時には1頭もいないのがひどく気にかかったが、だからといってどうすることも出来ぬ。まさか行列を引き返らせるわけにもゆかぬ、象のことに手間取ったおかげで目的地に着くのは夜になるのではないかと心配になってきた。

行列は先を急いだ、昼には着く予定だった処に着いた時にはもう4時近くになっていた。そこで食事を済ませ先へ進んだ。とうとう日が暮れてしまった。その間に偶然ながら行列が村から1、2マイルのところへさしかかると、象が2、3頭やって来るのにでくわした。それはやはり結婚式の行列に行ったもので、式も終わりどこかへ戻るところであった。象使いの男たちに話を持ちかけ、いくらか金を包んでやると、男たちはわれわれの行列に加わるのを承諾した。こうして象の件はなんとか願いがかなえられたわけだが、行列が目的地に着いた時には夜の11時近くになっていた。

花嫁側の人たちは気をもんだり、ぶつぶつ言っているところだったが、 行列はようやく着いた. 私は夕方になると間違いなく寝入ってしまう癖があっ たが、それはたとえ結婚式の日であろうと例外ではなかった。私は行列が目的 地に着くより先にかごの中でぐっすり寝入ってしまっていた. 着いた時にはと もかく起こされ、パリチャーワンの儀式⁶を済ませた。その他の儀式も次々に 済ませた。盛夏に、それも2日間かごにゆられた後のことである。日が暮れる とすぐに寝入ってしまう癖,さらに体はくたくたに疲れているときている.目 を覚ましているだけでも私には大仕事だった。その夜、一切の式が終わり、私 のめでたい結婚式も済んだ。私はその式を全部は覚えていない、また、式の時 自分がどんな役割を果たしていたかすらろくに覚えていないほどである。子供 のころ、姉が人形で結婚式遊びをすると私も一緒に遊んだものだったが、自分 の本当の結婚式もちょうどその遊びと同じようなものだった。私には結婚の意 味もわからず、自分に責任が出来たとも感じなかった⁷緑談の取決めにも儀式 の進行にも自分から加わったわけではなく,パンディットや「床屋」,あるい は、家の女たちや嫁の家の女たちに指図される通りにしたまでのことで、最後 に皆が私の結婚式が済んだと考えたに過ぎぬわけだ!一体どういうことになっ たのかさえ私にはわからなかった。もっとも、兄嫁が家に嫁いで来たように私 の嫁もいつかは家に来るだろうということだけはわかった。

結婚式を済ませてすぐには嫁を家に連れてこないことも私たちの田舎の風習である。挙式後、しばらくしてからささやかな二度日の行列が嫁を迎迎をでにてととれる。それを「ドゥラーガマン」。私の時も嫁めるにでは戻らなかった。行列は2日間そこにとどまり村に帰った。嫁の家のは、行列が遅刻したことや予期していたような盛大なものでなかったことは、行列が遅した様子だったが、装身具や衣服、それに菓子など、嫁や嫁倒ったまったがの女性をあるの贈物を見ると、気分が晴れたようで皆が上機嫌になのの大きないの女性をあやそのほか参列していた人たちが喜んだのはきっとで媚した。嫁慮の女性たちゃそのほか参列していた人たちが喜んだのはきっと花媚した。

兄嫁は部屋の外へ出ることさえなかった。もっとも、用があって部屋から出るときには皆に退いてもらう。皆といってもそのような場所にいるのはわが家の女中だけなのだが!そもそも男は奥には顔を見せないことになっている。小さな男の子でさえそのときは立退かねばならなかった。ところが、パルダーの見地からはそれでも十分ではなく、親許からついてきている女中が兄嫁の姿が見えぬように布切れで隠しながら案内するといった有様だった。私はとても幼かったので時にはとんだりはねたりしているうちに兄嫁の部屋に行くことがあり1、2度は兄嫁の顔を見たこともあった。母やおば、それに姉たちがその部屋に行くことがあれば、兄嫁はサリーの端を頭上から顔に垂らすのであった。わが家の女中もだれ一人兄嫁の部屋には入ってはならなかった。

家内が嫁いで来たときもやはり同じように面倒なことをしなければならなかった。この風習は長い間続いたが、徐々にすたれていった。実家からになりてきていた女中は戻ってしまい、わが家の女中の一人が世話をするようになりその女中と少し口をきないことになったが、母のびと振舞うことになり自分の部屋から出て奥で自由に歩きまわることがあっても戸外で寝るととてかった。私はといえば、休暇で家に帰ることがあるとさせ、妻のにはなってかった。夜、皆が鬼ようにしていた。だが、私は睡くてその時間にいかなか起きられない。しばどうしても目を覚まさぬことがある。するといるか起きられない。しばどうしても目を覚まさぬことがある。すると、母やおばが、朝早く皆のまだ寝ているうちに起き上って元の寝台に戻っていたと気づかれないようにするのだ。だれにも夜中にどこかへ行っていたと気づかれないようにするのだ。だれにも夜でにどこかへ行っていたと気づかれないようにするのだ。だれにもないのだ。だれにも夜中にどこかへ行っていたと気がれるにしている下男にさえ滅多に気づかれないようにするのだ。

バルダーの風習のために夫婦は二人だけになるにはこうしなければならなかった。私は子供の頃から家を離れているほうが多かったので、休暇で家に戻るのが妻に会う唯一の機会なのだが、それも今言ったような具合なのだ。したがって結婚とのかた45年にもなるのだが、一緒に過ごした日を合計しても

2年にも満たぬほどである。学生生活はパトナー、チャプラー、カルカッタで過ごし、弁護士になってからも多くはカルカッタで独り暮らしをしていた。パトナーへ移ってからも家族とは1、2度僅かの期間一緒に暮らしただけである。非協力運動が始まってからは家に戻る機会は一段と少なくなったし、家族と一緒に暮らす便宜も得られず、また、仕事に迫われてそうする暇さえなかった。. (未完)

(計)

- 1 大家族であったがために、それまでのプラサードの兄姉の結婚の際も、プラサードの父は縁談や結納、挙式に関することは一切を伯父や従兄に任せていたというわけである。
 - 2 Ārā ビハール州西端にあるシャーハーバード県の北東部に位置する.
 - 3 Tilak 婚約式及びその際、花嫁側から媚側へ贈られる金品を指す。
- 4 ヒマラヤに源を発し北部州の北東部を経てビハール州サーラン県(前述)の南端部でガンジス川に合流する。このサーラン県の対岸が北部州のバリヤー県である。
- 5 Jeth インド暦の3月、陽暦の5~6月にかけては雨季前の一年中で 最も暑い時期。
- 6 原文には、ボージプリー語でParichawan とある。ヒンディー語ではParchan . 嫁側の女たちが花婿を家で出迎え、花婿の額に(ダヒーと米粒の)ティーカーをつけたり、燈明を捧げたり、頭上に杵をかざしたりする儀式、プワド地方では、花婿に対しても、花嫁が婚家へ初めて行く際にも行なわれる。その際、女たちが歌う歌も同名である。Rahul Sankrityayan (samp.)。Hindi Ka Loksahitya, pp. 217, 220
- 7 大家族制なので、そのまま勉学を続けることが出来るし、生計の心配をする必要もないわけである。
- 8 Hajjam アラビア語で床屋の意、普通にはNaiと呼ぶ、結婚式にはこのカーストの男女が付人の役目を果たす。
- 9 ボージプリー語で Duragaman. ヒンディー語では Dviragaman.本来「再来」、「再訪」の意であり、挙式後すぐに花嫁を婚家へ連れて行くのに対し、実際の結婚生活が始まる際に再度嫁を出迎えに行くことを指す。ここでは挙式後、一度も嫁を婚家に連れて行かずに、ドゥヴィラーガマンの式が行なわれるわけである。

〔訳・註〕 古賀勝郎